

# 神楽における死霊祭祀

——山口県山代地方の山鎮<sup>やまじめ</sup>神楽について——

井 上 隆 弘

## 【抄録】

山口県山代地方で執行される神楽は、分布する地域から山代神楽とも、祭儀形態から山鎮神楽ともいわれるが、「天大將軍」の神がかりおよび「山鎮」という特異な祭儀によって特徴づけられる。この神楽は中国地方に分布する荒神神楽の系譜を引くものであるが、ミサキと呼ばれる崇る死霊が強く結びついている。こうした死霊祭祀は「山鎮」などと呼ばれ、藁蛇と鎮め物を入れた俵を神木に巻き付けて鎮める祭儀として古くから行われてきた。それが天大將軍の舞と結びついていたのが今日の山鎮神楽である。先行研究によれば、この地方の神楽は幕末以降に安芸十二神祇の舞がもたらされ天大將軍の舞が大きな変化をとげたとされるが、本稿では、この天大將軍の性格の変化の諸相について明らかにした。こうした死霊祭祀としての性格は、この地方の過酷な歴史を反映したものであった。

キーワード：天大將軍，山鎮，年祭，ミサキ，荒神神楽

## はじめに

山口県山代地方は周防の東北部に位置し、東は広島県、北は島根県に境を接する山間部一帯である。東を小瀬川、西を錦川が流れ、錦川沿いには第三セクターの錦川鉄道が走っているが、県下でも交通の便はきわめて悪い僻地である。

中国山地の中心部が比較的なだらかなのにたいし、西端部のこの地方は花崗岩からなる比較的険しい地形となっている。藩政期には楮栽培と紙漉きで知られたが、近年は農業以外は産業らしい産業もなく過疎化が進んでおり、近隣の都市に通勤する人も多い。

さて、この地方で執行される神楽は、分布する地域から山代神楽とも、祭儀形態から山鎮神楽ともいわれるが、「天大將軍」の神がかりおよび「山鎮」という特異な祭儀によって近年注目を集めるにいたった。

この神楽については、つとに牛尾三千夫が『神楽と神がかり』所収の「河内神と山ノ神楽」<sup>1)</sup> (1985年)において報告している。

湯川洋司は「木に蛇を巻く祭り」<sup>2)</sup> (1995年)において山鎮祭儀をミサキ信仰との関係で説き、その由来を死霊祭祀に求めようとした。

三村泰臣は、「周防地方の年祭とその意味」<sup>3)</sup> (2000 年), 「山代神楽と山代舞」<sup>4)</sup> (2002 年) などにおいて、山代神楽における年祭の意味とその成立過程について詳細な検討を行い、「山巻き」(山鎮) が死霊祭祀であることを明らかにした。

2004 年度には山口県教育委員会によって総合的な調査が行われ、その結果は『山代地方の神楽－山口県山代地方の伝統文化に関する調査研究事業－』<sup>5)</sup>と付属の CD-R にまとめられた。

近年は小原清の「山代地方の山舞」<sup>6)</sup> (2010 年) などの研究がある。

この神楽については現在、旧玖珂郡本郷村(以下いずれも現岩国市)の山代本谷神楽、美和町の金山神楽、山代白羽神楽、釜ヶ原神楽、東谷神楽、錦町の上沼田神楽などが活動している。

山鎮神楽は、年祭と呼ばれる「天大將軍」の舞と神木における「山鎮」祭儀に特徴づけられる式年の大祭の執行を基本としている。「年祭」あるいは「山鎮祭」の由来について金山神楽保存会所蔵の『神楽宝鑑』<sup>7)</sup>には次のように記されている。

俗に年祭というのは昔流行病伝染病が大に流行した時に神様に立願して疫神祭としてその後六年に一度七年に一度或は十二年に一度年祭をしますと神様にお約束をした祭であって神事神供等実に嚴重を極めたものである

このように「年祭」とは、神への立願と願果たしという信仰に由来する祭祀形態であることがよく理解できる。

ここに記されているように、山鎮神楽は干支の一周に当たる満 12 年に一度、あるいは半周の数えの 7 年に一度執行されるのが通常であるが、例外的には 8 年に一度というところもある。

山鎮神楽の祭儀形態はそれぞれの神楽団あるいは執行地で若干の異同があるが、ここでは筆者がこれまで調査を行なった金山神楽と山代本谷神楽を例として述べていきたい。

## 1. 山鎮神楽の祭儀構造

### 1 山鎮神楽の祭場

山鎮神楽の祭場、いわゆる<sup>かんだの</sup>神殿には神社の社殿や地区会館などが用いられる。四方を注連縄で結界して、天井に丸い天蓋が吊るされ、中央に「天神地祀八百萬神降臨鎮護祈修」の幡が下げられる。天蓋の中には十二神、東西南北の四方には四神の幡が下げられる。後者の四神のうち一神は地域の祭神の名になっている。周囲には三十二神の幡が下げられる。また 12 年に一度の大年祭には六十四神の幡を下げる。前者の三十二神は吉田神道の大元宮内宮に祀られている神と、また後者の六十四神は大元宮内宮外宮の神と一致する<sup>8)</sup>。しかし実際にはすべての神の幡を下げる<sup>と舞ができないので</sup>、現在では十二神の幡のみを下げて行う。

神殿の東北の隅、つまり丑寅の方角の上部に御棚を吊る。ここには、山鎮祭儀で用いられる藁

蛇と御幣、さまざまな鎮め物を入れた五斗俵が置かれる。御棚に祀られる藁蛇は「大王」と呼ばれ悪神とされる。

こうした祭場のこしらえに神楽団あるいは執行地で大きな異同はない。

## 2 金山神楽における祭儀の概要

以下、2009年10月、11月、2015年11月と3回にわたって調査を行なった、岩国市美和町の金山神楽について年祭で行われる祭儀を検討していきたい。

金山神楽で伝承している演目は次のとおりである。

①<sup>かん</sup>神戸の開き、②煤掃き、③七夕、④三贅返し、⑤小太刀、⑥五郎皇子、⑦恵比須、⑧柴鬼神、⑨三鬼、⑩大江山、⑪大蛇、⑫岩戸開き、⑬山鎮め（現在休止中のものを含む）。

年祭には、このうち何番かの舞が奉納される。例えば2015年11月2日、美和町牛ヶ多和で執行された年祭では、「神戸の開き」「煤掃き」「恵比須」「岩戸開き」「大蛇」「山鎮め」の6つの舞が行われた。

以下、主要な次第について解説したい。

### 神戸の開き

「神殿開き」であろう。「太夫」と呼ばれる素面の舞人2人が、右手に鈴、左手に扇を持ち舞う。神迎えの舞、清めの舞とされる。舞手がすり足で密着して円を描いて舞う。7種の舞が入っている基本の舞といわれる。

### 煤掃き

猿田彦面をかぶった1人舞。鬼神杖と扇を持ち舞う。清めの舞とされる。舞の最後は激しい旋回運動となる。安芸十二神祇から入った舞である。

### 恵比須

着面の1人舞。6本の笹竹を採り物として舞う。安芸十二神祇から入った舞である。

当地では明治初期に安芸十二神祇の舞が入り、大正期に石見神楽の舞が入ったといわれている。

### 大江山

8人の舞。鬼役3人は着面、他は素面。源頼光、坂田金時らが住吉大明神の助けを得て大江山の鬼を退治するといういわゆる狂言舞。石見神楽から入った舞である。

### 五郎皇子

6人の舞。一般には「五郎王子」とされる舞である。天地万物を宰領する盤古大王の死後に生まれた五郎王子が4人の兄たちに「所望分け」を求めて争いとなり、門前の仲裁で仲直りし公平に所望分けをするという物語。40年～50年前くらいまでは、年祭で必ずやらなければならない舞であった。1時間ほどかかる舞であるため、現在では行われない。

「五郎皇子」が必ず行われなければならない舞であるということは、山鎮神楽の年祭が本来備

中、備後などに分布する荒神神楽の性格をもつものであることを示唆して興味深い。

#### 山締（天大將軍）

「天大將軍」とも「山の神」ともいう。天大將軍と傍太夫4人の舞。山鎮神楽独特の神がかりの舞である。

一同、棚の前に着座し、神事。神職の祝詞、修祓、一同拝礼。

まず、傍太夫4人、右手に鈴を持ち舞う。4人の舞手はすり足で体を密着させて円を描くように舞う。

こうした舞い方は各舞におおむね共通する。おそらく山鎮神楽の舞の形態を規定しているのは、もっとも重視される神がかりの舞である天大將軍の舞であろう。

天大將軍登場。傍太夫4人は鈴を置き、天大將軍を取り囲んで体を密着させ、その体をぐるぐる回しにする。金山神楽、山代白羽神楽などで行われる作法である。

天大將軍、右手に鈴、左手に弓を持って舞う。傍太夫は四方に座す。

傍太夫が天大將軍の背中に竹棹を結ぶ。天大將軍は弓で四方を突き、天蓋を突く。そして天大將軍は弓を竹棹に持ち替える。天蓋を突き、そこに吊るされた袋から米を降らせる。金山神楽独特の作法である。さらに、四方の小天蓋を突いて叩き落とし、中央の天蓋を叩き落す。最後に棚を壊し、そこに置かれた藁蛇を落として、それが天大將軍の体にかからまると神がかかる。以上、息のむような激しい舞である。

傍太夫は天大將軍を倒さないように体を支え太鼓の上に置く。そこに天蓋や旗など天大將軍が叩き落した祭具一切を載せる。神職が霊戻しの祝詞を唱える。

この天大將軍の神がかりは「死に入り」とも呼ばれる。金山神楽では美和町の生見八幡宮への神楽奉納を行なっているが、過去にこの舞で舞い手が亡くなったことがあり、現在では行われないう。このように天大將軍の「死に入り」はきわどい業であり、この地方の神楽の厳しいあり方をよく示している。

#### 山締（山巻）

神社境内の御神木に藁蛇を巻き、山鎮祭儀のために用意された御神幣を中心として宇津幣、銭旗稲幣などを立て、七七本のミサキ幣を差す。御神木は榊などのいわゆるカタギと呼ばれる木である。

神職が「大祓」「中臣の大祓」「山鎮祝詞」を唱える。

### 3 山代本谷神楽における祭儀の概要

次に岩国市本郷町を中心に活動している山代本谷神楽について。山代本谷神楽で伝承している演目は次のとおりである。

①禊祓い、②御神楽、③導きの舞、④七夕舞、⑤恵比寿舞、⑥那須野ヶ原、⑦大江山、⑧小太刀、⑨柴鬼神、⑩八岐の大蛇、⑪山の神。

ここでは、2013 年 10 月に本郷町岡の<sup>おか さこ</sup>迫の貴布祢神社（河内七所神社）で山代本谷神楽によって執行された年祭で実修された次第について検討していきたい。

#### 褌祓い

神楽殿および神楽人を祓い清める神事舞という。4 人が素面、白装束で右手に御幣と鈴、左手に櫛を持って舞う。

#### おかぐら

1 人舞。素面に烏帽子をかぶり、色鮮やかな直垂と袴を着し、右手に鈴、左手に扇、大幣を持って舞う。天岩戸の天鈿女の神楽に由来するというが、舞人は天照大神と呼ばれる。

#### 導きの舞

着面の 1 人舞。鼻高面をかぶり、右手に扇、左手に杖を持って舞う。猿田彦命が天孫降臨を導いたとされる故事にちなみ、神楽殿を掃き清め神々をお迎えする舞という。

この後、恵比須が奉納された。

#### 芝鬼神

素戔鳴尊役は鬼面、扇と杖を持つ。天照大神役は素面、烏帽子に鉢巻、扇と御幣を持つ。高天原で乱暴を重ねる素戔鳴尊を天照大神がいさめる神話に由来するというが、鬼神が「荒平大神」を名乗っており中国地方の荒平舞の系譜に属する舞であることは明らかである。鬼神は「素戔鳴尊の持つ杖の由来」を説くが、天照に屈服して剣を賜り素面の舞をまう。

この後、大江山が奉納された。

#### 引き天蓋

天井の天蓋を引いて遊ばせる行事。比婆荒神神楽、大元神楽などでは神下ろしとされるが、当地では福を呼ぶ作法とされている。本来の意味が換骨奪胎されたものであろう。

この後、八岐の大蛇が奉納された。石見神楽から入ったものである。

#### 山の神

山鎮祭と言われる。大筋で金山神楽と同じである。最初に御棚祭を行う。

まず傍太夫 4 人が弓矢で舞い、それを置いて太刀を抜くと肩にかけて舞う。

竹鉦を持った天大將軍が登場し、次のように唱える。

「いかなる神も鎮め鎮まり候。張ったる弦ははずし袋に納め、抜きたる刀は鞘に納め、いかなる神も鎮め鎮まり候。これより山の神、天大將軍の御舞候。」

天大將軍は神名幡や天蓋を次々と叩き落し、最後に棚の上の藁蛇を突き落として、それが体に巻き付くと神がかかる。境内の神木で山鎮（山巻）が行われる。

## 2. 天大將軍のメタモルフォーゼ

山鎮神楽をもっとも特徴づけるのは天大將軍の舞といえる。天大將軍は非常に分かりにくい神

格である。山鎮祭儀で天大將軍は悪神である大王と戦いそれに憑依して「死に入り」を行うことで大王を鎮め送却する。まさに命がけの厳しい祭儀である。それにしても、ある神格が別の神格に憑依するということがありうるのであろうか。

そもそも大將軍神とは陰陽道の曆神・疫神<sup>9)</sup>であるが、ここでは善神として登場している。陰陽道から離れて独り歩きした神格と思われる。

天大將軍はいかなる神であろうか。それは、神楽祭儀において天大將軍がいかなる形で登場しているかを検討することなしには明らかにすることはできないであろう。

先行研究<sup>10)</sup>が明らかにしているように、山鎮神楽の天大將軍の舞は幕末以降において安芸十二神祇の影響を受けて造形されたものである。それ以前の形態は周防の海岸部で行われている「行波の神舞」などに近いものであったと考えられる。

そこで以下、「安芸十二神祇」「行波の神舞」そして「山鎮神楽」のそれぞれにおける天大將軍の造像を比較検討していきたい。

## 1 安芸十二神祇の天大將軍

以下、広島県廿日市市の原十二神祇の「天臺將軍」を例として述べていきたい。安芸十二神祇の將軍の舞は太夫と將軍が2人で組んで舞うところに特徴がある。

まず「花舞」「刀舞」「弓舞」の3つの舞を連続して行う。

「弓舞」で太夫は舞いながら天臺將軍に鎧を着せ「石帯」と呼ばれる白木綿布を結ぶ。

次に太夫は「しこ幣」と呼ばれる青色の小旗を背中に結びつけ、刀を背中に結びつける。2人はつるんで舞いながら装束を整えていく。

天臺將軍は太夫から弓を受け取る。そして激しく舞い、「木の謂」「天臺將軍の謂」「弓の謂」を唱える。東・南・西・北の御久米の袋を弓で突いてから「十二神祇の謂」を唱える。

東・南・西・北の米袋を次々と突き刺し米を舞殿に降らせ、最後に中央の米袋を突き刺すと神がかり舞殿に倒れる。すかさず腰抱がだきかかえて大太鼓の上に座らせる。これを神主が扇であおぎながら神がかりを解く。

こうして天臺將軍はふたたび矢をつがえた弓を持ち舞殿に立つ。神主が東・南・西・北に日の丸扇を差し出すと、天臺將軍はそれに向けて弓矢を放つ所作を行う。そのとき次の言葉を唱える。

東方に向いて弓を張れば、東方は青龍王の御座所。

南方に向いて弓を張れば、東方は青龍王の御座所。

(西方・北方・天・地に同様に唱える)

最後に「是より亥子に当たり、悪魔祓いのはなしける」と唱え、亥子の方向に弓矢を放つ<sup>11)</sup>。

このように安芸十二神祇の天臺將軍の舞は、前半の舞いながら衣装を整え御久米の袋を弓で突いて神がかりの舞と、後半の悪魔祓いの矢を放つ作法からなっているといえる。

これについて梅野光興は次のように指摘している。すなわち、天臺將軍は「あらかじめ舞台の袖で衣装を着て舞台に登場するのではなく、観客の目の前で衣装が整えられていくのだ。これは「太夫」が「將軍」という神を作り上げていることを見せる演出だと思う。」「最後の弓のくだり」においては「將軍の動きは太夫によってコントロールされている。」「つまり、將軍は太夫が神楽の舞台に人工的に作り出した「神」であり、太夫の指令によって敵に攻撃を加える武器なのだということがわかる」<sup>12)</sup>。

この「神を作る」という視点は神楽における神の問題を考えるうえで非常に重要な指摘であると考えられる。

ここでは天大將軍は「太夫」すなわち司霊者によって使役される使霊としての性格をもった神格となっていると思われる。

この天大將軍は神がかかるが託宣はしない。この將軍の神がかりは、それにつづく悪魔祓いの矢を放つ作法のために呪力を身につけるためのものと考えられる。いわば、それに先立つ「神を作り上げる」プロセスの総仕上げになっているのである。

## 2 行波の神舞の天大將軍

山口県岩国市行波<sup>ゆかば</sup>において執行される「行波の神舞」の天大將軍については、『日本庶民文化史料集成』第一巻所収「周防行波神楽本」の「行波神楽台本」（仮題）に「天大將軍之謂」がある。私に番号を付けて内容を整理すると大略以下のようになっている。

### ①天大將軍の御尊容

天大將軍の容姿はうるわしく、その左の手は天の少宮に至り、右の手は天の日隅の宮に至り、両足は底津根国に跨る。このように宇宙に天大將軍の全体が充満している。

### ②御鎧と具足の聖なる由来

天大將軍の鎧は天照大神、神武天皇に由来するもので、甲は七曜九曜、廿八宿が備わっている。腹巻の五色の糸は五行の衆生の怨敵をはらうものである。五枚下りの草摺は五行の徳が備わっている。

### ③御弓の聖なる由来

御弓は月弓尊（月読尊カ）の御像をもって作られ、上の二十八卷は天の二十八宿をかたどり経津主武甕槌が坐すものである。元の三十六卷は地の三十六禽を学び、八千矛神が守護している。

### ④御矢の聖なる由来

矢の羽、矢柄、鏃はそれぞれ神代に由来をもつものである。

### ⑤御宝剣の聖なる由来

御宝剣は素戔鳴尊が出雲の国で大蛇を退治したときに得た霊剣である。この宝剣は動かずして敵を破り、祓わずして悪魔を退散させることは疑いない<sup>13)</sup>。

ここでは、①に見るように天大將軍は宇宙大に広がる巨神として描かれている。あたかも土公

神祭文に記されている土公神の父王・盤古大王を思わせるものである。その備える武備はそれぞれが陰陽道のコスモロジーあるいは記紀神話に由来する聖なるものとされている。ここで將軍の具足が五行の徳を備えるとされていることは注目される。以上から行波の神舞の天大將軍には土公神信仰の影響が見られるように思われる。

ここに見られる天大將軍の造像は超越的な神格としてのそれである。

ところで金山神樂の所蔵する『神樂宝鑑』所収の「天大將軍美談」は、この「天大將軍之謂」と一致する。ここから、かつての山代地方の神樂は行波の神舞と同様の内容をもったものであったことが分かる。これをふまえて山鎮神樂の検討に移ろう。

### 3 山鎮神樂の天大將軍

山鎮神樂における天大將軍の芸態については前述したとおりであるから、ここではそれを他の二者、なかでも安芸十二神祇のそれと比較してみることにしよう。

山鎮神樂の天大將軍について注目すべきは、將軍とともに舞う4人の舞人が「太夫」などと呼ばれていることである。金山神樂・山代本谷神樂では「傍太夫」、山代白羽神樂では「側太夫」であるが、読みはいずれも「そばたゆう」であろう。ここには安芸十二神祇と同様の考え方が見られる。

また金山神樂・山代白羽神樂では、天大將軍が登場した後の舞で四人の傍太夫が將軍の体を手荒くぐるぐる回しにする。天大將軍を神がかりに追い込むための作法であろう。ここでは將軍は太夫によって強制的に舞わされている。安芸十二神祇で見たように將軍の動きは太夫によってコントロールされているのである。

一方、天大將軍は超越的な神としての相貌を示す。山代本谷神樂・釜ヶ原神樂では將軍は神殿に登場すると、前述の「いかなる神も鎮め鎮まり候」云々の言い句を唱える。

ここでは天大將軍は神々の争いを鎮める超越的な存在として登場しているかに見える。

同様の言い句は、周南市の三作神樂の「五郎王子」にも見られるという<sup>14)</sup>。ここには周防海岸部の神樂の天大將軍の残像が見られるように思われる。

ところで山鎮神樂においては、安芸十二神祇と同様に將軍は天蓋を突きそこに吊るされた袋から米を降らせるが、それだけでは神がからない。さらに、四方と中央の天蓋を叩き落し、最後に棚を壊し、そこに置かれた藁蛇を落として、それが天大將軍の体にからまると神がかかるのである。

この神がかりの意味するものについて、金山神樂会長の谷口和正氏のお話では、天大將軍に神殿に下げられた四八の神名幡の神がのり移って藁蛇（悪神）を封じ込め、最後に退治するが、同時に自分も倒れるということであった。

しかし、吉田神道の大元宮の神に憑依するというだけでは「死に入り」という、この命がけの神がかりの意味を十分に説明しないのではないか。山鎮神樂の天大將軍の神がかりは、悪神であ



る大王をわが身に引き受け、ともに「死に入り」送却するための営為ではなかったかと思われる。

そして、ここに最初に提示した疑問の解答も示されている。天大將軍という神格が別の神格に憑依することができるのは、それが大夫によって使役される使霊としての性格をもったカミであったからである。

ところで山鎮神楽における天大將軍は託宣は行うであろうか。金山神楽ではこの託宣は見られない。しかし2008年、岩国市本郷町波野の年祭が山代本谷神楽によって執行されたさい、天大將軍が太鼓の上に横たえられ「霊戻し」が行われたときに「米占」が行われた例がある<sup>15)</sup>。

以上からは天大將軍の矛盾した性格が浮かび上がってくる。一方で天大將軍は太夫に使役される使霊的な性格を持ちながら、他方で山代本谷神楽の言い句に見られるような超越神的な性格をもつ場合もある。本郷町波野<sup>はの</sup>の年祭の例でも、言葉による託宣はないが、米を取る占いが行われたのである。これは一種の託宣儀礼で、天大將軍の超越神的性格を物語る。

このうち天大將軍の「使霊的な性格」は安芸十二神祇のそれを引き継いだもの、そして「超越神的性格」は行波の神舞など周防海岸部の神楽のそれを引き継いだものと考えられる。山鎮神楽の天大將軍は、こうした矛盾する二つの性格が複合した神格なのである。

### 3. 荒神神楽としての山鎮神楽

#### 1 名と河内神・荒神

##### 名と河内神

牛尾三千夫氏は前掲稿「河内神と山メ神楽」において「一 河内神の信仰」という一項を設け、それをふまえて「二 山鎮祭と山メ神楽」の考察に入っている。あたかも両者は関係があるかのようだが、実際には後者の祭儀のなかで河内神が<sup>こうちがみ</sup>なんらかの位置を占めているとは読み取れない。

これはもともとの論考が『弥栄峡の民俗』<sup>16)</sup>所収の「神社信仰」の一項である〈河内神の信仰〉と別稿の「山鎮祭と山鎮神楽」を合体させたものであるからである。

しかし牛尾氏がわざわざ「神社信仰」のなかから〈河内神の信仰〉だけを取り出して山鎮神楽の考察の前提としたについては、なんらかの意図があったと考えるべきではないか。

例えば次のような記述がある。

「(美和町内の河内社ではもっとも大社である－著者註)滑鎮座の河内神社の氏下として末社的な取り扱いを受けるに至った旧一二ヶ村の河内社は、明治以前には村々の氏神社として、又、小組の小祠として、深いかかわりがあったことと思われる。」<sup>17)</sup>

牛尾氏によれば河内神とは「古く山地を開墾するにあたって、先ずその水源に山の神と水の神を祀り、これを河内神と名付けて祀ったもので、いわゆる原始農耕に於ける稲作の灌漑用水を得

るための守護神として」<sup>18)</sup>祀られたものであったのである。

このように河内社とは、この地域の小集落の開郷と深いかわりがある神と考えられるのである。

中国地方の荒神神楽が中世に開郷された小集落である「名」<sup>みょう</sup>を執行単位として行われることはよく知られる。牛尾の考察も、おそらくそのことを念頭においたものと思われる。

山代地方においては、鎌倉時代に入ると荘園から名が自立し、名主が名田と従属する農民を支配する関係が成立した。中世も時代が下るにつれそのなかで次第に小農民が自立していったが、名を集落の基本単位とする社会のあり方は近世にも引き継がれたと思われる。

享和2年(1802)に書かれた『玖珂郡志』によれば、例えば釜ヶ原村(現岩国市美和町)では15の小名を挙げている<sup>19)</sup>。また駄床村(同)では26の小名を挙げている<sup>20)</sup>。名が集落の最小単位として意識されていることが分かる。

この名は山鎮神楽の執行単位であったと思われる。例えば2009年10月12日の美和町北原の年祭は、北原、佐古、西ノ地、北垣内、大谷という五つの名の合同で行われ、それぞれに総代がいるということであった。

1980年代の調査によれば、本郷村波野では年祭は総代名主が集まって行くとされている。また同波野原では、波野原、中区、下区の三集落が合同で祀る、総代が決めた神楽を奉納し、名主が蛇を作る、となっている<sup>21)</sup>。

しかし現在では名が山鎮神楽の執行単位として意識されることはあまりなくなっている。

河内神については、釜ヶ原神楽の「大將軍」の舞で大將軍が次の言い句を唱えることが注目される。

「河内五所大明神も御満足に候らえば、国家安泰の御舞い鎮め候。」<sup>22)</sup>

河内神が神楽を納受するものと考えられているということであろう。

ところで牛尾は前掲稿で「年祭の有無を示す神社のリスト」を挙げている。このうち年祭の執行が確認できるのは30社、うち河内神社は11社で最多ではあるが、それ以外の神社も19社を数える<sup>23)</sup>。山鎮神楽を河内神の祭とすることはできないのである。

しかし、例えば山代地方の山鎮祭儀ときわめてよく似た「山舞」の祭儀を伝える島根県鹿足郡六日町の「抜月神楽」<sup>ぬくつき</sup>は河内神の祭とされる。河内神の信仰は、周防の山代地方だけでなく安芸の佐伯郡、石見の美濃・鹿足郡に分布している。河内神の信仰と神楽との関係の解明は今後の課題であろう。

### 荒神と藁蛇の「大王」

天大將軍とともに山鎮神楽において重要な神格は、最後の山鎮祭儀において天大將軍によって鎮められる藁蛇に形象化された神であろう。

この藁蛇は東北すなわち丑寅の隅に吊られた棚に、さまざまな「鎮め物」を詰めた俵とともに祀られる。丑寅が凶方であることはよく知られるが、実際この藁蛇は現地でも悪い神だとされ

る。

牛尾三千夫は、「釜ヶ原で午年の年祭神楽を行なう場合には、先ず第一番に釜ヶ原の田の中にある荒神様のお祭りをしなければならない慣わしで、夕食前に荒神祭りは必ず済ましておくことだと、固く云い継がれていると云う」<sup>24)</sup>と述べている。

山鎮祭儀が荒神と深い関係にあるということであろう。中国地方の荒神神楽においては荒神は藁蛇に形象化されるが、藁蛇を用いる山鎮祭儀で祀られる神を考えるうえで注目すべき事実である。

またこの藁蛇が「大王」と呼ばれることは興味深い。

この「大王」については『玖珂郡志』の瀬田村の「黄幡社」の項に次のような記事がある。

「山神祭」が5年に一度ある。まず藁人形を作り、これを大王と呼ぶ。大縄をない、長さ7尋半、大きき両手に抱えるほどにして、これを縮めて人形とする。烏帽子狩衣を着せ幣帛を持たせて、社人1人が後ろにいて仮主人となり、もう1人の社人と問答をする。御酒を供えて舞いをする。このとき人形が自然と踊躍する。これを神移という。舞が終わるとトネリコの神木で祓いをして、<sup>よりまし</sup>戸の人形を解いて神木に7巻半まく。五穀を煎って撒き、五穀成就の祈祷をする<sup>25)</sup>。

玖珂郡志は19世紀の初めの成立であるから、この「山神祭」は幕末から明治にかけての成立と考えられる山鎮神楽の先行形態と考えられる。現在の「山鎮（山巻）」に類似した祭儀が行われており、藁蛇ならぬ藁縄で人形が作られ、それが大王と呼ばれるのが興味深い。「大王」の名称の由来については不明であるが、先行する荒神信仰との関係があるのではないか。

## 2 荒神と山鎮神楽

山代地方北部の旧玖珂郡錦町（現岩国市）には他の山代地方と同様に7年ごとに行われる年祭が分布している。錦町の神楽は天大將軍の舞を行わないが、神楽を奉納した後に神木に蛇を巻きつける儀礼が行われる点は同様である。

これについては湯川洋司が昭和60年当時の聞き取りを18例ほど紹介しているが、その中から特に興味深い事例を以下に紹介したい。

「宇佐八幡宮」

宇佐 七年祭。七年目ごと

十月十八、十九日を中心とした土曜日、日曜日に行う。それぞれ前夜祭とヒノハレという。祭礼は常の年の例祭も含めて六つある名が順次担当するが、年祭は満六年に一度なので、いつも夏焼名が当たる。準備した藁蛇と俵は拝殿の柱に縛り付けておく。前夜祭の零時ごろに「夜中の神事」を行い、湯立てがある。翌日のヒノハレはまず、名頭と総代が拝殿に臨時の棚を設け、「暁の神事」を行い、神楽を舞う。特に大舞と称し、最後のヤマタノオロチの舞が終了すると、御幣を挿した大俵と蛇とを境内の榎の木と一緒に巻きつけに行く。そ

の場で神官が「朝の神事」を行い、終了する。

「大元神社」

下須川 七年祭。七年目ごと

十一月の第二土曜日、日曜日に行う。拝殿の四方に東西南北と動植物の模様のあしらった切り紙を張る。藁蛇を社殿後方にある神木の榎の木に巻く。地上から一メートルほどのところに巻き、蛇の口をあけさせ、小豆粥を流し込む。そのとき「オキナサマ、三口半にあがれ」と唱え、次の七年祭までの満六年分の粥を食べさせる。オキナサマはこの蛇体をいうようで、「下須川の年祭のときは古江の旧村社河内神社の蛇が会いに来る。この蛇を巻くのは古江の人々」というほか、「蛇の口をひっくり返すと雨が降る」という伝承が残されている。なお蛇には幣を挿す。

「三輪神社」

小山 七年祭。七年目ごと

オンジャ（雄蛇）・メンジャ（雌蛇）の二匹の蛇を作る。山ノ神棚を吊り、アワ、ヒエ、トウキビなど七種の穀物を入れた俵七つ、七種の野菜、一升餅（ゴクウ）、月形・星形の餅、五升餅などを供える。お祭りの後、松の木に蛇を巻き、飯や酒を与える。この木をオキナサンと呼ぶ。蛇の口が向いた方向の人は食われるが、尾が向いた方の人々は蛇の糞により豊作になるという<sup>26)</sup>。

前述のとおり、山鎮神楽における天大將軍は幕末から明治初期にかけて造形されたもので、その時点で現在のような天大將軍の舞と山鎮祭儀（山巻）との結びつきが生み出されたのである。以上には、それ以前に単独で行われていた山鎮祭儀（山巻）の原型がうかがえて興味深い。

さて18の事例を参照すると、いずれの年祭でも神楽を奉納しない例はあるが、いわゆる「山巻き」は必ず行なっている。また宇佐八幡宮の事例から年祭の執行が名を基本単位として数名の合同によって行われていることが分かる。

宇佐八幡宮の事例で、「特に大舞と称し、最後のヤマタノオロチの舞が終了すると、御幣を挿した大俵と蛇とを境内の榎の木と一緒に巻きつけに行く」というところは興味を引かれる。この「大舞」とは例祭とは異なる神楽のことだという<sup>27)</sup>。「ヤマタノオロチの舞」の特別な意味がうかがえよう。この舞は、本来は藁蛇に形象化された荒神を遊ばせる儀礼ではなかったか。

こうした山代地方北部の年祭では、本来は藁蛇の荒神を遊ばせて、その後木に巻き付けて鎮める荒神神楽の古い形態が行われたと考えられる。

この藁蛇（あるいは巻き付けた木）が「オキナサマ」などと呼ばれていたことは注目される。金春禪竹が『明宿集』において記している秦河勝伝承によれば、秦河勝は翁の化現であり大荒神となったとされている<sup>28)</sup>。ここにも示されるように翁は荒神と考えられていたのである。

これら山代地方北部の山鎮祭儀（山巻）には、山代神楽の古層に横たわる荒神神楽としての原

型を見て取ることができよう。

#### 4. 山鎮神楽における死霊祭祀

##### 1 年祭の起源伝承と死霊祭祀

以上のような年祭の起源を語るものとして、湯川洋司氏が前掲稿で紹介する錦町広瀬八幡宮の「御年祭記録簿」の以下のような記述がある。

天正一九年（一五九一）に村人が奇怪な病気や異変に苦しめられ、それを卜部に占わしめるところ悪鬼の祟りである、その悪鬼とはミサキという亡霊であるということになった。そこで神社において七年ごとに大祭を行い、神慮をなぐさめるため氏子各戸より五穀の初穂を供え、別に祭場を設け人別幣を置いて一同に持たしめて祓いを行い、祓い串を取り集めて神社の森の木に巻き付けて修祓したのが始まりで、後に「十二の舞」を舞うようになった。この「山巻の式」を「氏子の悪魔祓執行」とも「ミサキ鎮め」ともいうというのである<sup>29)</sup>。

記事によれば、天正年間に村人が奇怪な病気や異変に苦しめられ、それを占ったところミサキという亡霊の祟りと出た。そのため五穀初穂を供え祭場を設けて人別幣を祓い、取り集めて神社の木に巻き付けて修祓し鎮め、後に「十二の舞」を舞うようになった。この「山巻の式」を「氏子の悪魔祓執行」とも「ミサキ鎮め」ともいうというのである。

これは明治44年（1911）に書かれたものであり、文字どおり史実とは信じがたいが、年祭の起源をミサキという死霊の祟りを鎮めることに求めている点は興味深い。

三浦秀宥によればミサキにはさまざまな存在形態がある<sup>30)</sup>が、ここでは基本的に非正常な死に方をした死者の霊と考えてよからう。例えば備後の比婆荒神神楽などでは、ミサキは荒神祭祀の対象からは厳しく排除されていた。しかしここではミサキが年祭の基本的な祭祀対象とされていることは注目されよう。

##### 2 山鎮祭儀にみる死霊祭祀

###### 佐伯郡内における死霊祭祀

三村泰臣も山鎮祭儀の死霊祭祀としての性格に注目している。

氏は、山代阿賀村の祀官・広兼氏が安芸佐伯郡津田村で執行してきた神社祭祀を記録した「広兼家文書」の「諸控」の天保8年（1837）6月末日の記録に、「八幡宮膳部所に倒死の者」があったため、8月14日に「御清祓山まきをする」と記されているのに着目して次のように述べている。

「山巻きは山の神などの神霊よりも、餓死者などの変死霊を対象にして行なわれていたように

思われる。…死霊や変死霊などの悪神が祟りをしないように、それらを清める目的で行なわれていたのではなかろうか<sup>31)</sup>。

### 山鎮祭儀の祭具にみる死霊祭祀

山鎮祭の死霊祭祀としての性格はその祭具にもっともよく示されている。これについて美和町生見八幡宮・西村巖宮司所蔵の「山鎮祭記録」を参照しよう。以下、牛尾前掲書には一部不完全なところがあるので、引用は『弥栄峡の民俗』所収の初出稿による。

記事には「幣帛之事」として次のようにある。

神幣合串 一本 七尺五寸用ハ立下リ扇折り切り下ケ付ナリ

同五行幣 五本 二尺五寸

千本串 矢形尔作留 百二十本 又各眷属幣

宇津幣 三十六本 又各我子幣

錢旗稲幣合指 拾二本

申幣合串 串 一本

このうち「神幣」は前述のとおり山鎮の中央に立てられる御幣である。「五行幣」は五行を表す五色幣である。また「千本串」は「眷属幣」,「宇津幣」は「我子幣」と説明される。ただし委細は不明である。

ここには記されていないが、図解には「魁幣 二尺 七十七本<sup>32)</sup>とある。この「魁幣」とは釜ヶ原神楽などで言っている「ミサキ幣」であろう。これについて小原清は「「魁幣」「ミサキ幣」「荒神幣」「矢子幣」とも呼ばれ、山鎮祭がミサキや荒神と深く関わる祭であることが分かる<sup>33)</sup>と述べている。ここでも祟る死霊であるミサキが重要な位置を占めていたのである。

この七七という数は忌日の四十九日に通じるものであろうか。文書の「備物之部」の末尾には次のようにある。

土餅 七十七

引餅 七十七

金物 七十七

魁錢 七十七文

これらは俵に詰められ藁蛇とともに棚に置かれるいわゆる「鎮め物」であるが「七十七」という数はミサキ幣の七七という数と一致する。とりわけ最後の「魁錢」はミサキに対する供物として注目される。これらの「鎮め物」はミサキという死霊を鎮めるものであろう。

この文書の末尾には次のように注記されている。

霊植木俵龍形 鎮

先 俵のなかえ七十七文の魁錢

土餅 七十七 引餅 七十七 金物 七十七 刃物 一ツ

右五品と千本串は兼て俵内に入レ修ム事肝要也<sup>34)</sup>

「霊植木俵」は棚に置かれる俵であろう。「龍形」は藁蛇のことであろう。両者は一体のものとして鎮められるのである。

この俵の中にはミサキ幣 77 本に対応する 4 種の鎮め物と 1 つの刃物が入られる。この 1 つの刃物には悪霊との縁を切るという願いが込められていようか。

それらとともに俵に入れられる「千本串」も数多くのミサキを表象するものであろう。「幣帛之事」には「眷属幣」と説明されていたが、この眷属とは実はミサキのことだったのである。

こうした山鎮祭の祭具のあり方には、その死霊祭祀としての性格がもっともよく示されているといえる。

ところで俵の中の鎮め物として「土餅」「引餅」「金物」それぞれ「七十七」との記事にも興味が引かれる。「土餅」は泥団子、「引餅」は米の小餅である。これらには農業への災いを鎮める意味があろう。「金物」については「蛇神の属性に鍛冶にかかわる一面のあることを示唆する」との伊藤彰の指摘がある<sup>35)</sup>。花崗岩地帯のこの地方では、かつてたたら製鉄が行われていたのではない。これらは山鎮祭儀の生業にかかわる部分といえる。

美和町の大三郎では祭の前日に各戸主が山に入って家族の人数分の榎の枝を採ってきて、山の神と呼ばれる山鎮の根元に立てる<sup>36)</sup>。山鎮祭儀には村人各人の厄払いの意味があったのだろう。

前述のとおり山鎮祭儀は本来荒神と深いかかわりをもつ祭儀であった。しかし、そこにはミサキと呼ばれる祟る死霊が強く結びついていたのである。そしてこのミサキを鎮めることこそ山鎮祭儀の眼目であったのである。山代地方の山鎮神楽はなぜこのような性格をもつことになったのか。以下でその歴史的背景を探ってみよう。

## 5. 紙漉き・飢饉・山鎮神楽

こうした死霊を祀る神楽がこの地域で行われるようになった背景には、この地域の厳しい歴史があった。

関ヶ原合戦後、毛利氏は中国 8 か国から所領を大幅に減封され防長 2 か国に押し込められた。そのため山代地方に対しては従前の 4 倍の重税を課したのである。とりわけ、この地方の特産品である和紙に目を付け年貢を紙で納めさせた。そして製紙原料である楮こうぞの作付けが強制され、食糧となる米や麦の生産は極端に制限された。そのためいったん飢饉が起きると餓死者が続出することとなったのである。

なかでも「享保の虫枯れ」と言われる虫害による飢饉は悲惨を極めるものであった。

享保 17 年（1732）の飢饉の惨状を「品秀寺年代記」は次のように伝えている。

七月十二三日より田方稲に雲蚊といえる羽を生じたる虫夥しくたかりて稲を焦枯る事、諸人耳目を驚かす。彼虫夥しく稲にとまれば青稲焦倒れ、紫色になりて朽る。七月中旬の事な

れば早田はかぶき、晩田ははしり穂に出る頃なれば、青田変じて枯野となるこそ悲しけり。  
 (中略) これによって人民、飢饉災に及、飢えかつえ死にする。目の当てられぬ次第也。さて九月下旬より、萩より検見衆六頭(人名略)以上十二人来て、六手に分け、山代中三十日余に見る。シイラ粉(穀ばかりで実のない粉-著者註)まで取り上げ、五合五勺引にして取り上げ、百姓難儀に及ぶこと大形ならず。(中略) あまり枯野にむごたらしき検見取上げ、其上、シイラ粉一石に現米五斗五升宛とられ、夫故百姓飢え、かつえ、皆死にけり。(中略)  
 (以下、享保一八年正月) 山代中うえ人仕出帳十二万二千四百六十人といえり。此内死人、男女三万四千七百十六人と三十三か村より申出有り。

享保17年当時の人口は不明であるが、生見、下畑、本郷村などで2割から3割程度が餓死したといわれる<sup>37)</sup>。

山代地方では、こうした困窮のため一揆が繰り返された。慶長の一揆、享保の一揆、天明の一揆、文政の愁訴などが知られている。

享保3年(1718)の愁訴における山代の百姓の要求はほとんどすべての項目が楮栽培や紙漉きに関するものであったが、例えば次のような項目があった。

山代では畠を三四段所持していると畠石二石の租税、銀にして二拾目を徴収し、この畠で作る楮が十釜あれば米三石一斗、石貫銀にして三十一匁を租税として徴収し、この十釜の楮から紙を漉けば百四十目の把銀を租税として徴収される。(中略) 従って山代では畠に三重の課税があるので、百姓の多くは潰れ、田畠も多く荒所になり、百姓をして行くのが困難であるので、他宰判と同じように畠石だけの課税にしてそれ以外は許してください<sup>38)</sup>。

このように山代の紙漉き農家は過酷な重税を課せられていたのである。

山代地方で神楽を執行している集落には傾斜地の紙漉き集落が多い。この地方の神楽が死霊鎮めを厳重に行う背景には、この地方の農民の苦難が秘められているのである。

## おわりに

さて筆者は紀要第23号所収の拙稿「神楽と死者のまつり」において、広島県備後地方の比婆荒神神楽について、牛尾三千夫氏の「祖霊加入説」に批判を加えた。それは荒神神楽は死者の霊が年忌をへて祖霊に加入する儀式であるとするものであった。これにたいして同稿では荒神祭祀の基体をなしている「小さき神」のまつりに焦点をあてて牛尾説を批判した。また紀要第24号所収の「比婆荒神神楽の祭儀構造」においては荒神神楽における土公神などの神の重要性を指摘した。



比婆荒神は本山荒神を中心として土公神やさまざまな小さき神をふくめた集合霊であったが、荒神祭祀からは崇る死霊であるミサキは厳しく排除されていた。

これに対して山代地方の神楽は荒神神楽の系譜を引くものであるが、そこにはミサキと呼ばれる崇る死霊が強く結びついていたのである。そしてこのミサキを鎮めることこそ山鎮祭儀の眼目であった。こうした死霊祭祀は「山鎮」とか「山巻」と呼ばれ、神楽につづいて藁蛇と鎮め物を入れた俵を神木に巻き付けて鎮める祭儀として、山代地方で古くから行われてきた。

先行研究が明らかにしているように、この地方の神楽は藩政期には行波の神舞など今日の周防海岸部の神楽に近いものであった。それが幕末以降に安芸十二神祇の舞がもたらされて大きな変化をとげたと考えられる。なかでも天大將軍の舞は大きな変化をとげ、「死に入り」と呼ばれる特異な神がかりを行う舞となった。この天大將軍の舞と山鎮祭儀（山巻）が結びついたのが今日の山鎮神楽の姿なのである。

こうした山鎮神楽の死霊祭祀としての性格は、楮の栽培を強制され紙による年貢の上納など重税を課され、いったん飢饉となれば餓死者が続出するような、この地方が負ってきた過酷な歴史を反映したものであったのである。

#### 注

- 1) 牛尾三千夫「河内神と山ノ神楽」（『神楽と神がかり』名著出版、1985年）。
- 2) 湯川洋司「木に蛇を巻く祭り」（『山口県史研究』3号、山口県、1995年）。
- 3) 三村泰臣「周防地方の年祭とその意味」（『日本民俗学』第223号、日本民俗学会、2000年）。
- 4) 同「山代神楽と山代舞」（『民俗芸能研究』第34号、民俗芸能学会、2002年）。『中国地方民間神楽祭祀の研究』岩田書院、2010年、に「第三章 山代神楽と「山之神」」として収録。以下引用は同書。
- 5) 『山代地方の神楽－山口県山代地方の伝統文化に関する調査研究事業－』（山口県教育委員会、2005年）。
- 6) 小原清「山代地方の山舞」（『山口県地方史研究』第103号、2010年）。
- 7) 前出4) 付属CD-R所収。
- 8) 前出6)、33頁参照。
- 9) 天大將軍は法華經などの仏典にも見出せるという（谷本弘之「將軍という名の神楽考 序説」（『山陰民俗』第46号、1986年））。
- 10) 前出4)、参照。
- 11) 著者は2009年10月に原十二神祇を実見しているが、ここでは主として以下を参照した。三村泰臣「安芸十二神祇－阿刀神楽と伊勢神社神楽－」（『民俗芸能』87号、民俗芸能刊行委員会、2006年、48～52頁参照）。
- 12) 梅野光興「いざなぎ流「神楽」考－米とバツカイを中心に－」（『神楽と祭文の中世』、思文閣出版、2016年、268頁）。
- 13) 『日本庶民文化史料集成』第1巻（三一書房、1974年、301～2頁参照）。
- 14) 前出3)、130頁。
- 15) 神田竜浩「山代本谷神楽」（『民俗芸能』92号、民俗芸能刊行委員会、2012年、41頁）。
- 16) 『弥栄峡の民俗』（編集発行 名勝弥栄峡総合学術調査団、1979年）。
- 17) 前出1)、474頁。
- 18) 同前、473頁。
- 19) 広瀬喜運著・桂芳樹校訂『玖珂郡志』（松野書店、1975年、181頁）。

- 20) 同前, 189 頁。
- 21) 湯川洋司「山口県下における〈年祭〉について」(『山口大学教養部紀要』第20巻, 1986年, 138～9頁)。
- 22) 前出5), 40 頁。
- 23) 前出1), 478～9 頁参照。
- 24) 同前, 492 頁。
- 25) 前出19), 143～4 頁参照。
- 26) 湯川洋司「錦町の年祭」(錦町史編纂委員会編『錦町史民俗編』錦町, 1995年, 117～8 頁)。
- 27) 前出21), 141 頁参照。
- 28) 日本思想体系24『世阿弥・禅竹』(岩波書店, 1995年) 参照。
- 29) 前出2), 118 頁参照。
- 30) 三浦秀宥『荒神とミサキ』, 名著出版, 1989年。
- 31) 以上, 前出4), 98～9 頁参照。
- 32) 前出16), 332～3 頁参照。
- 33) 前出6), 32 頁。
- 34) 以上, 前出16), 332 頁参照。音に漢字を宛てているところは, 私にひらがな表記に改めた。
- 35) 伊藤彰「山ノ神信仰」(前出16), 307 頁)。
- 36) 同前, 302～3 頁参照。釜ヶ原, 大三郎における年祭は, それぞれ午年と未年の旧暦9月および11月に行われた。9月の「秋祭」で山ノ神を舞って, その藁蛇を11月の「冬祭」のとき神木に巻くのである。このことは本来, 山ノ神(天大將軍)の舞は山鎮祭儀(山巻)とは別のものであったことを示唆していると思われる。
- 37) 以上, 『美和町史』(編集・発行 美和町, 1985年, 339～41 頁参照)。
- 38) 同前, 333 頁。

(いのうえ たかひろ 共同研究嘱託研究員／民俗芸能学会会員)